

ピースフェア 2023 に参加して

北川直実(編集者)

「ピースフェア in 千葉」に参加して 6 年目になります。この間、ステージ、展示、そしてコロナウィルス感染拡大のため「きぼーる」で開催できなかった 2020 年にはオンライン・シンポジウムをドイツや沖縄の若者たちと行うなど、さまざまな発表をしてきました。毎回は新たなことへのチャレンジでしたが、今年は2つのイベントの企画を試みました。

その一つは、企画展「軍都千葉と軍都広島—空襲・原爆の背景を考える」と 6 月 17 日の「集い」でのトーク「戦争で潤った街」。そしてもう一つは同じく「集い」での群読「あたらしい憲法のはなし」です。

前者に関しては、昨年 2022 年 8 月に横浜で開催された第 7 回「戦争の加害パネル展」のなかの特集展示「軍都・広島と戦争加害」に出会ったことがきっかけでした。会場では制作者の一人であるジャーナリストの植松青児さんが、パネルの前に立ち解説されていました。それはこれまで教科書や平和運動のなかでもあまり語られてこなかった被爆地・ヒロシマのもう一つの歴史、「8 月 5 日までの広島」についてです。植松さんは、当時広島で建築業に携わり入市被爆者でもあったご自分の祖父のことを詳しく調べ、自分につながる一市民が体験した生きた歴史を伝えてくれました。

私自身は、広島・長崎の被爆者の方々をはじめ戦争体験者の聞き書きをしたり、戦争に関する本を何冊か作ったりして、少しばかり戦争のことを分かっている気になっていたのですが、頭をハンマーで殴られたような衝撃がありました。自分は「8 月 5 日までの広島」のことを、これまでなぜ知らなかったのか、侵略戦争の拠点であった広島の加害性に目を向けようとしなかったのかと愕然としました。戦争を深く理解するためには、連続してしている歴史の一断面を切り取るのではなく、多面的に視ることの大切さを感じました。

軍都広島に原爆が落とされた理由があるように、軍都千葉にも空襲被害にあった背景があります。植松さんたちのパネル展示は、わが街・千葉のもう一つの戦争の歴史を知るきっかけを与えてくれるだろうと確信しました。植松さんはもとより、広島在住の共同制作者のお二人にも快く承諾いただき、「ピースフェア」での展示が実現することになりました。

展示制作者が「集い」のステージで自らの展示について語るというイベントも初の試みとして企画しました。植松さんの対話のお相手を、大学院生の井上未菜さんをお願いしました。井上さんは、昨年ピースフェアに参加した「『わたし』と『れきし』展」のメンバーです。展示のなかで紹介していた松本清張著『黒地の絵』の舞台となった福岡県小倉(こくら)出身であるという話を一年前に聞いていました。小倉もかつては軍都であり原爆投下予定地だったのです(実際には小倉ではなく、長崎に落とされたわけですが)。敗戦後、米軍キャンプが作られ、朝鮮戦争のときには出撃拠点として兵士がこ

こから激戦地へ送り出されるなど、戦後も戦争とともにあった街です。偶然にも小倉で育った井上さんと植松さんが何を語り合うのか、ワクワクしました。当日、植松さんは制作しながら考えられたことを語られ、井上さんは展示を見て感じた疑問を植松さんに投げかけ、聴く側の私達は自分にはない視点に気づかされ、考えを深めることができました。十分な時間ではなかったですが、お二人のコラボは新鮮で、もっと聞いていたかったです。トーク後には、改めて展示を見ていく方も少なからずいらっしゃいました。

今回は、横浜、広島、小倉、千葉の市民が時空を超え世代を超えて繋がり、戦争の歴史に向き合い直すことができました。歴史の解釈の違いはもちろんあると思いますが、それもまた興味深いことです。わが街の歴史は知って嬉しいことばかりではありませんが、負の歴史も知ることこそが、二度と戦争を起こさせないために必要なことではないでしょうか。